

春夏秋冬

台湾徒然



第52回

塀の中の政府

今年7月13日早朝、台湾最高検特捜班が襲撃したのは、なんと判事と立法委員（国会議員に相当）の自宅や事務所など34カ所に及んだ。判事らは身柄を確保されたものの、議員は間一髪悟って普段着のまま逃走した。

逮捕されたのは、高裁の裁判長陳榮和ほか李春地・蔡光治計3人の判事と地検の検察官、そして議員の秘書と判事の愛人の計6人。

逃亡した何智輝委員は、1990年から五期も国民党の国会議員を務め、その途中に県知事にも当選している、苗栗の「ドン」とも呼ばれている人物。苗栗は台湾本島西北部、客家人の多いところで、彼自身も「世界客属総会常務理事」を務める「客家界のボス」でもある。パソコン基地として名高い新竹サイエンスパークの分区を県内に導入する計画からみ、国家財政を食い物にした背信などの罪により摘発され、06年に一番で19年の有期刑を

受けた。しかし、控訴を繰り返して、その2年後になんと台湾高等裁判所で無罪判決を勝ち取ってしまった。

検察当局は2年余にわたる地道な捜査を続け、裁判官買収の確証をつかみ、この日、ついに強制捜査に乗り出したのだ。報道によると、裁判官と何委員は、現金を高裁で受け渡ししていたほか、判決の前後10回以上も外で食事とともにしており、事前に無罪を宴席で申し渡していたというから、なんとも牧歌的なのである。3人は「常習犯」ではないかと疑われており、判決はどうも金次第だったらしい。

テレビには、元受刑者の有名人が次々に登場して、酒でもタバコでもなんでも手に入る、株の取引をしている奴もいると、「刑務所の中も金次第」を告白したりして、庶民は唾然とするばかり。

年末に台湾五大都市の首長選挙をひかえる馬英九総統は、司法院長（司法

のトップ）を更迭するとともに、7月20日、法務部（法務省）の下に、贈収賄摘発専門の機関「廉政署」を新設した。台湾にはもともと調査局という部署もあつて、まるで屋上屋を重ねるような苦肉の策であるが、なにしろ現在

拘留所には係争中の民進党陳水扁前総統が1年以上も身柄を拘束されており、国民党の議員がわずかの金で自由の身になっていったとなれば、支持者の不満が爆発しかねないことを危惧したものである。

今回汚職の舞台となったのは、台湾高等法院（裁判所）。分院をのぞき台湾地区唯一の高裁として無二の権威を



陳水扁前総統の獄中著作表紙

持つ。またその建物は、昭和9年に建てられた優美な建築で、往時から植民地統治の司法権力がここに集中していた場所だ。

裁判官や検察官までが入った拘留所あるいは刑務所。台北のこれらの施設には陳水扁前総統のほか、前県知事や前議員、そして財界の大物も慌しく出入りを繰り返しており、獄の中だけでも一つの国家機構が成立するのではないかといわれる。影の内閣ならぬ「闇の政府」である。それだけ摘発が厳格に執行されているともいえるが、それでもみなさん懲りないようなのである。

何委員はいまも所在不明。捜査当局は懸命にその行方を追っているのだが、彼と同時に起訴された妻（結婚時本人も議員）は一人娘を連れて大陸に逃亡中で、なんでも対岸で悠々自適の生活を送っているらしい。娘は北京大学医学部に就学中とのことで、ちよつと日本では考えられない人生模様である。

柳本 通彦

やなぎもと・みちひこ
ノンフィクション作家。著書に『台湾・霧社に生きた』、『台湾先住民・山の女たちの聖戦』、『タロキ峡谷の閃光』（以上現代書館）、『台湾革命』（集英社新書）、『明治の冒険科学者たち』（新潮新書）など。元日本軍人軍属の最期の声を綴った『台湾戦後65年』<http://www.taiwansengo.jp/>を更新中。